

エジプトに渡った浦島太郎

——タウフィック・アル＝ハキーム『洞窟の人々』をめぐって——

榮谷温子

<0>

浦島太郎は、Encyclopedia of Britannicaにも、Urashima of Minzunoe (瑞江の浦島)と、名前の載っている有名人であるが、その浦島が、エジプトでもその名を知られることとなった経緯について述べたいと思う。

<1>

浦島が、エジプトに現われた (とは言っても、活字の上での話だが) のは、1933年、タウフィック・アル＝ハキーム Tawfiq al-Hakim (1898?—1987) の『洞窟の人々 ('Ahl al-kahf)』という戯曲中でであった。

その物語は、洞窟で、三人の男と犬が一匹、目覚めるところから始まる。彼らは、キリスト教徒で、ディケアノス王のキリスト教迫害を逃れ、洞窟に隠れて一晩過ごしたところであった。ところが、実際には、彼らの眠っている間に、外界では、三百年の月日が流れていたのである。

三百年前の人間が生き返ったという知らせは、王宮まで届いた。びっくりする王と王女プリスカに、プリスカの教育係ガリヤースが、「ウラシマの物語と呼ばれる、日本諸島の物語」(p. 40) を語る。

「その国の諸王の公式の年代記に書かれています。ミカド『ユウリャク』の治世の第21年目に、若い漁師『ウラシマ』が、『ヨシヤ』の郡から、彼の舟で漁に出て、帰りませんでした。彼について、何の知らせも聞かれぬまま、31の王と女王の治世、即ち4世紀が続きました。それから、公式の年代記には、

ミカド『ゴヌジュワ』の治世に、その若者『ウラシマ』が現われたが、すぐにまた行ってしまい、誰も、彼がどこへ行ったか知らない、と述べられています。」(p. 41)

ガリヤースは、このように、はるか昔の人間が、戻ってくることがあるのだと述べるが、浦島が、四世紀間どこにいたかについては、答えられなかった。

さて、三人は、キリスト教世界となった外界を見て喜ぶが、すぐに恐ろしいことに気付く。羊飼いやムリーハーは、自分の羊がいなくなっていること、大臣マルヌーシュは、家族が既に死んでしまっていることから、自分たちが、現実世界と何の繋がりも無い人間となってしまったことを悟り、洞窟に帰る。

ただ、やはり大臣のミシュリーニーヤーだけは、納得しなかった。なぜなら、彼の目の前には、彼の秘密の婚約者、王女プリスカがいたからである。

が、ミシュリーニーヤーも、三百年という時間の流れを思い知らされることとなる。彼の愛したプリスカは既に亡く、目の前にいるのは、彼女の子孫で、生まれたときに、占い師によって、先祖の聖女王プリスカに似るだろうと予言されたことから、プリスカと命名された、別のプリスカであったことを知ってしまうのである。

絶望したミシュリーニーヤーは、二人の後を追って洞窟に入り、再び眠りに就こうとするが、餓死寸前に、プリスカが飛び込んでくる。プリスカは、彼に、私のために生きて、と必死に呼び掛ける。

「時間? 私を貴方から引き離すものなんて何

もないわ。魂は、時間より強いから。……私はプリスカ。……きっと私は彼女なのよ。……貴方は、私のために甦り、私は、貴方のために甦ったのよ。……魂は時間に打ち勝った。立ち上がって、ミシュリーニーヤー。私は、最初に言葉を交わしたときから、貴方を三百年前から愛してきたかのように思えるの。そして、何千年も貴方を愛していくでしょう。』

しかし、ミシュリーニーヤーは息を引き取る——別の時代での再会を約束して。

プリスカは、傍らで、この愛の奇跡を理解出来ずにいるガリヤースに、あの浦島伝説を語る。そして、以前彼が答えられなかった問い、即ち浦島が四世紀間どこにいたかという問いに答えを出す。

「あそこに、ヨシャの浜に海が広がっている。夏の日、青き沈黙の海が。若き漁師ウラシマは、小舟で出ていき、網を投げて待った。ほぼ一日待ったのに、獲物はなかった。黄昏時、帰りの時刻となった。悲しく、また疑い無く幸運なき帰り。私には、それが見えるの。今、その全てが、私の幻影に浮かんで見える。

「ウラシマを見ると、一匹の海亀が網にかかっているのが見出された。彼は、それをとっても喜んだ。しかし、彼は思い出した。亀は、海の王のもとで、聖なるものであることを。その寿命は、千年で、また万年だとも言うことを。そして、亀殺し、これは禁忌だということを。そこで、若者は、それを優しく救い、細やかで熱い祈りを神々に捧げた後、それを水へ返してやった。

「その後、彼は何も得なかった。暑さが強まって、沈黙と静けさが、海と空気と全てのものを包んだ。ウラシマは、うとうとし、舟を目的なくゆっくりと流れるままにして、眠ってしまった。そのとき、海から、あたかも夢が立ち昇るかの如く、白い複数の肩の上に垂れた、長い黒髪を持つ、一人の美しき乙女が立ち昇り、風の優しさで水面を滑って、眠っている若者の頭のところに立ち止まるまで、近づいてきた。そして、彼の上に見を屈

め、軽く触れて、彼を目覚めさせ、言った。『驚かないで。我が父、海の王が、私を貴方のもとへ送ったのです。貴方の心の美しさに感謝致します。つい今し方、貴方は亀に命を用意して下さいました。今から私と一緒に、決して夏の死なない島の、我が父のお城へいらして下さい。もし、貴方が望むなら、私は、貴方の妻となり、私達は、永遠に幸せに暮らしましょう。』

「ウラシマは、己れの聞いたことに驚いた。海王の娘の美しさは、彼を圧倒し、彼は、彼女にその身を委ねた。彼女は、二本の権の一本を取り、彼が、もう一本を取って、二人は、静かに、決して夏の死なないその島、南の方角を目指し、小舟を漕ぎ始めた。そして、遂にそこに到達し、若者は、そこに、一目も見たことのない、珍しい海の宝石と輝くばかりの宝物とで飾られた城、そして、至る所彼を取り囲む妙なる美を見た。

「宴が始まり、彼は、見慣れぬ贈物や高価な進物を、海の王国の人々から受け取った。そして、一年続いた喜びの後、海王の娘は、彼の妻となり、三年後までは醒めることの無かった幸福が、彼を満たした。

「そうして、彼は、漁に出て来てからずっとヨシャの国に置き去りの家族を思い出し、妻に頼んだ。私を一日故郷に行かせ、家族に会わせ、お前のもとに帰らせてくれ。そうしたら、私は、以後決して、お前と離れない。

「妻は、静かに泣いた。そして言った。『貴方が行きたいのならそうなさい。けれど、貴方が長く行っていることは心配です。貴方が金輪際、私達の誰とも会えないことにならないかと恐れているのです。でも、私は、貴方が、私の言うことを守ってくれたら、貴方を私のもとに帰らせてくれる小箱を、貴方に上げましょう：箱を開けないこと。何が起っても、決して開けないで……決して。もし開けたら、貴方は決して私に会えなくなるわ。』

「ウラシマは、彼女に忠実であることを約束し、別れを告げて、彼女から去っていった。既に、決して夏の死なないその島は、夢の如く彼の背後で消え始めた。

「国に着いて、彼は奇妙なものを見た。全てが変わってしまっている。彼は、空しく、家族の家への道を見出そうとした。彼を驚きびっくりした目で見て、道で会う見知らぬ顔の一つでも知ろうと、空しく試みた。

「ある老人の横を通った。ウラシマは、彼に自分の家族のことを尋ねた。その老人は、ぎょっとして、一瞬驚き、叫んだ。『若い、ウラシマの伝説を知らないとは、お前はどこから来たのかね!? ウラシマは、四百年前、漁に出て、帰らなかった。墓に行けば、歳月が侵食した石碑が見られるだろう。』

「事は、ウラシマの上でごちゃごちゃになった。彼は、夢か蜃気楼か魔法でも見ているのかと思い、自問し始めた。『これはどうしたことか?』そして、持っていた小箱のことを思い出した。隠れた秘密を、時間の秘密を、四百年を三年と思った秘密を、解き明かしてくれるだろう物がこの中にある、と思い付いたが、妻、海王の娘の言葉と、彼女との約束が思い出された。

「彼は、ためらった。しかし、疑いが戻ってきて、彼を悩ませ、道を踏み誤り混乱せんばかりにさせた。箱には、魔法があるのではないか? 箱は、魔法にかかっているのではないか? それとも、私は、理性を失った人間なのか? 箱の中のこの魔法は、何なのか? どんな姿か、どんな構造か? 不幸にも、彼は、約束を忘れ、箱を開けてしまった……」

「何も無かった。白く冷たい煙が、ゆっくりと上昇し、夏の雲のように、大気中に昇っていくのを見ただけ。[煙は]沈黙の海面上を、南の方へ向かっていった。

「これで全て。こうして、ウラシマは、自らの手で、その幸福を消し去ってしまったことを、そして、永久に、愛する海王の娘のもとには帰れないことを、悟ったの。」

「そして、彼は、すぐに感じた。自分自身が変わってしまったことを。彼の血は冷たくなり、歯は抜け落ち、髪は、雪のように白くなって、身体組織は震え、肉体は縮み、滋養が無くなった。あっという間に、彼は、老人になってしまった。四百年の重荷の下で、彼

は、地に沈み、変わらぬ沈黙の青き海の浜で、死を待って横たわった。」(pp. 133-136)

こうして、浦島の物語を語り終えたプリスカは、三百年の間、恋人への愛を貫き通したミシュリーニーヤーと運命を共にする道を選び、一人洞窟に残って生き埋めにされる。

〈2〉

あらましこのような話である。ここで、まず問題となるのは、著者 Tawfiq al-Hakim が、どこから浦島伝説を知ったのかということだが、ラフカディオ・ハーンの『Out of the East』が種本らしいことが指摘されている¹⁾。

この浦島伝説は、日本書記をはじめとする諸古典に近い筋になっている。例えば、亀も、浜で子供たちに苛められていたのではなく、浦島が捕らえたことになっている点や、亀の背に乗っての竜宮城行き——これは中世以降の型である²⁾——ではなく、乙姫が迎えに来て、二人で舟を漕いでいったなど、現代の絵本に見られる浦島とは、少々食い違う部分があるが、まず『日本書記』巻の第十四、雄略天皇では、

〔四十七〕〔二十二年の〕秋七月、丹波の国余社の郡管川の人瑞江の浦島の子、舟に乗りて釣し、遂に大亀を得たるに、すなはち女に化為りき。ここに、浦島の子、感りて婦とし、相逐ひて海に入り、蓬莱の山に至り、仙衆を衆り観き……³⁾

と書かれている。これが、浦島についての最古の記録である。

また、『風土記』では、浦島の捕らえた五色の亀が、美しい乙女に変わる。彼女が浦島の目を閉じさせると、途端に二人は、大きな島に着く。乙女つまり亀姫と浦島は、夫婦となるが、三年後、故郷が恋しくなった浦島は、姫から玉匣を受け取って帰郷する。ところが、すっかり変わってしまった故郷を見て、浦島は、姫との約束を忘れ、玉匣を開けてしまい(老人にはならなかったが)、永遠に姫のもとへは帰れなくなる⁴⁾。

『万葉集』(巻第九、1740)では、浦島は、

玉くしげを開けると、膚がしわしわになり、髪も白くなって、結局死んでしまう⁵⁾。

さらに、『水鏡』の、まず、卷之上第二十二代雄略天皇に、

二十三年と申しし七月に、浦島の子蓬来へまかりにけりといふこと侍りしなり⁶⁾とあり、卷之下 第五十四代淳和天皇には、天長二年〔西暦 825 年〕……今年浦島の子は帰れりしなり。持ちたりし玉の箱を開けりしかば、箱の内より紫の雲一筋西ざまへ罷りて後、いとけなかりけるかたち、忽に翁となりて、はかばかしく歩みをだにもせぬ程になりき。雄略天皇の御代にうせて、今年三百四十七年といひしに帰りたりしなり⁷⁾。

と、帰還の年が明らかにされている。

また、『お伽草子』では、

……浦嶋太郎と申して、年の齡二十四五の男有りけり⁸⁾。

と「太郎」の名が出てくる。そして、

有日のつれづれに釣をせんとて出でにけり。……亀を一つ釣り上げける。浦嶋太郎この亀に言ふやう、「汝生有るものゝ中にも、鶴は千年亀は萬年とて、命久しき物なり。忽ちこゝにて命をたゝん事、痛はしければ、助くるなり。常には、此恩を思ひ出すべし」とて、この亀を元の海にかへしける⁹⁾。

という出来事のあった翌日、遙か海上に、美しき女房一人の乗った小船一艘を発見し、近づく。その女房は、「乗っていた船が難破した。私を本国へ送って欲しい。」と、泣く泣く訴えるので、

浦嶋太郎もあはれと思ひ、同じ船に乗り、沖の方へ漕ぎ出す。彼の女房の教へに従いて、遙か十日余りの舟路を送り、故郷へぞ著きにける¹⁰⁾。

そこそそ竜宮城であり、二人は夫婦としてそこで三年暮らした。浦嶋は、父母にあうため三十日の暇を乞う。女房は、例の如く、筥を取り出し、決して開けるなと言って渡す。

変わり果てた故郷に帰った浦嶋は、近くの庵の翁に、浦嶋の行方を問う。翁いわく、

「いか成る人にて候へば、浦嶋のゆくへをば御尋ね候やらん、不思議にこそ候へ。その浦嶋とやらんは、はや七百年以前のことに申し伝へ候……あれに見えて候古き塚、古き石塔こそ、その人の廟所と申し伝へて候へ」¹¹⁾ 結局、また、浦嶋は筥を開けてしまう。

こうした浦嶋伝説が、現在のような形に定着したのは、明治中期に巖谷小波が、京都府与謝郡の浦嶋神社の伝説を昔話として刊行してからで¹²⁾、彼が、「日本昔噺」の叢書名で博文館から昔話を出版し始めたのは、明治二十七年からのことだが、小波が、ちりめん本から影響を受けていたのではと見る意見もある¹³⁾。

「ちりめん本」とは、明治 18~25 年、長谷川武次郎により出版された『日本昔噺』Japanese Fairy Tale Series 全二十冊及びその続編の英訳本で、昔噺の英訳には、ヘボン、チェンバレン、そしてラフカディオ・ハーンらの在日英米人が携わった¹⁴⁾。

ハーンの *Out of the East* (1897, 明治 30 年) の *The Dream of a Summer Day* の浦嶋伝説が、ハキームの「ウラシマ」のもとになっているらしいことは前述の通りで、二人は常夏の島に行った (“they came to the island where summer never dies” p. 6) という脚色や、淳和天皇が、“Mikado Go-junwa” (p. 12) になっている (さらにハキームは、それを *Go-nujwa* と書き違えている。) という誤りなどは、ハーンのものである。

〈3〉

だが、そもそも、何故ハキームは、浦嶋を物語の中に書き込まなければならなかったのか。上述の通り、戯曲中で浦嶋の物語は、ガリヤースとプリスカによって喋られているだけで、話の筋に、積極的に関与している訳ではない。第一、三年も異郷で暮らした浦嶋と、一晚寝ただけのミシュリーニーヤーとを同一視するのは問題があり、婚約者への愛を貫いた彼に従おうとするプリスカが、ウラシマを語ったとて、両者を結び付けてしまうことには無理がある。

この問いについて考えるにあたり、まず、「洞窟の人々」という戯曲の題名について考察しよう。この題名は、コーランの『洞窟の章』から来ており、戯曲の題辞には、御丁寧にもその中の、洞窟の人々の説話の一節が使われている。（「そこで、我等は、彼らの耳を打ち、その洞窟に何年も留まらせ、そして、どちらの集団が、彼らの〔眠り〕続けていた期間を計算できたか試した」18：10～11）

洞窟の人々の説話は、『洞窟の章』の8～25節で語られている。多神教の国で、一神教を説いたため迫害された若者たちが、洞窟に逃げ込み、アッラーに助けを求めると、アッラーは、彼らの耳を打ち（眠らせた）、洞窟で眠っていた時間を正しく計算できるか試みた。彼らが洞窟にいたのは、三百年加える九年であった。

この説話は、ローマの Seven Sleepers of Ephesus の伝説がその源になっている。この伝説には、筋の細部において異なるいくつかの型があるが、Encyclopedia of Islam で述べられているものを、かい摘んで紹介しよう。

数名の若者が、偶像崇拜を拒み、キリスト教の信仰を守って、一匹の犬と洞窟に逃げ込む。皇帝デキウス（位249-251）は、彼らを餓死させようとその入り口を塞ぎ、その後、そのことは忘れてしまった。彼らは眠りに落ち、その間に月日は流れ、世は、キリスト教の時代となっていた。眠りから醒めた彼らのうちの一人が、パンを買いに町へ行き、古い硬貨をパン屋に差し出すが、パン屋は、その硬貨が何だか分からず（この古い硬貨騒動は、形は少し違うが、ハキームの戯曲の中にも採り入れられている）、若者は、王の前に連れて行かれる。全てが説明され、王（皇帝テオドシウスII世、位408-450）は、この若者こそ、肉体が魂とともに甦ることの証であると喜ぶ。若者は、洞窟に戻り、仲間の傍らで再び眠りに就いた。

もうひとつは、偶像崇拜の町にやってきた伝導者が、町の近くで三助をしながらか若者を扇動し、改宗させる。女と入浴しに来た王子

にも教えを説くが、失敗する。すると、神罰が下り、王子は死んでしまう。伝導者と若者たちは、一匹の犬とともに、王の追跡を逃れて洞窟に隠れた、というものである。

コーランでは、目覚めた後のことが余り述べられていない。これに対し、ハキームの戯曲は、彼らが目覚めた後の話である。『洞窟の人々』は、エフェソスの七人の眠り人伝説が素材になっていると言って良い。だが、コーランのメッキを彼らされているのである。

〈4〉

著者タウフィーク・アル＝ハキームは、父が弁護士だった関係上、法律学校に学び、1924年に卒業しているが、学生時代から演劇に熱中、両親は、彼をパリに留学させ、その演劇熱を冷まそうとした。ところが、彼は、パリで、益々演劇や文学に打ち込む。

彼のパリ生活は、彼の小説『ウスフル・ミン・アル＝シャルク』の、西洋の物質文明と東洋の精神文化との狭間で、次第に西洋に失望し、挫折していく主人公と重ねて考えることが出来よう。

彼は、1927年、両親によってパリから呼び戻される。エジプトを離れさせても、何の意味も無かったことを、両親は知ったからであった。

〈5〉

帰国後、書かれた作品の一つが、この『洞窟の人々』である。

そこには、西洋が色濃くにじみでている。そもそも、「戯曲」という表現形式自体が、偶像崇拜を禁じ、それゆえ演劇の発達しなかったイスラームの世界においては、異質なものであったと言える。

その中に、コーランや浦島太郎を置くことで、ハキームは、一種の中和を試みたのではなからうか。つまり、素材としての西洋と、器としての西洋とに対し、せめてツマとしてでも東洋を取り込みたかった、そのような心情を感じる。

『洞窟の人々』における浦島伝説は、つま

るところ、オリエントへ帰ろうとしたタウフィック・アル＝ハキームの、心の現われといえよう。しかし、また、その「浦島」が、オクシデントを通過してやってきた「ウラシマ」

でしかなかったところに、オリエントに帰り損ねた小鳥の、限界を見ることもできるのである。

注

- 1) 杉田英明「近代アラブ文学に現われた日本像——エジプトを中心に」(『中東における知日家研究』中東調査会, 1985) p. 78
- 2) *Encyclopedia Nipponica* 2001, Vol. 3 (小学館, 1985) p. 265
- 3) 武田裕吉校註 日本古典全書『日本書記』3 (朝日新聞社, 1956) p. 192
- 4) 久松仙一『風土記』(朝日新聞社, 1969)
- 5) 青木生子他校註『万葉集』2 (新潮出版, 1978) pp. 395-401
- 6) 中山泰昌編『校註日本文学体系』(誠文堂, 1932) 第12巻 p. 34
- 7) 中山, 前掲, p. 99
- 8) 市古貞次校註 日本古典文学大系『御伽草子』(岩波書店, 1958) p. 337
- 9) 市古, 前掲, pp. 337-338
- 10) 市古, 前掲, p. 339
- 11) 市古, 前掲, pp. 343-344
- 12) 『日本歴史大事典』(河出書房, 1956) Vol. 2, p. 259
- 13) 桑原三郎『論古 小波 未明 明治の児童文学』(慶応通信, 1979), p. 235
- 14) 桑原, 前掲, p. 233

文 献 (注に上げたものを除く)

I. Primary Source

al-Hakim, Tawfiq. *'Ahl al-kahfi*. 1933; Beirut: dar al-kitab al-lubunani, 1978

II. Secondary Sources

Haywood, John. *Modern Arabic Literature 1800-1970*. London: Lund Humphries Publishers Lim., 1971

Hearn, Lafcadio. *Out of the East—Reveries and Studies in New Japan*. 1897; Tuttle ed. Tokyo: Charles E. Tuttle Company, Inc., 1972

The Urashima Legend in "the People of the Cave" by Tawfiq al-Hakim

SAKAEDANI Haruko

The Japanese Urashima legend that is found in the Arabi play, "the People of the Cave" written by Tawfiq al-Hakim is one of the proves of his return to the Orient.

(さかえだに はるこ アラビア語学)

(1988年10月3日受理)

『言語・文化研究』第7号、正誤表

氏名	ページ,行	誤	正
佐藤 宏文	4,右5 5,右11 5,左40 7,右17 8,左10 9,右1, 4 10,レヅメ 2 10,レヅメ 3	dato と聞こえる, hisap] 語根〈galak〉 ／galak／のは, 参照の事。 Dewan Bahasa Indonesia Eijaan	dato' と聞こえる), [hisap] 語根〈galak〉 ／galak／は, 参照の事]。 <u>Dewan Bahasa</u> Indonesian Ejaan
太田 亨	16右19 16, 参 考文献	特に個々の… … 文法Ⅱ』	個々の… … 文法Ⅱ』
上野 勝広	21左33	balivia - nismo	bolivia - nismo

木村 琢也	42, 25	[v, z, ʎ]	[v, z, ʒ]
	45, 24	[ˈstar-re]	[ˈsta-re]
	45, 25	[s-ˈta-re]	[ʃ-ˈta-re]
	46, 21	in W/m ² ν	in W/m ² , ν
	47, 7	tskuau	tsukau
佐藤 邦彦	61	yes or on	yes or no
	62	une vasi ja	una vasi ja
	62	una vai i ja	una vasi ja
	62	hondo 例には	例はhondo には
	63	両形容詩の	両形容詞の
	63	表意単どうし	表意単位どうし
	64	「積極的事実」あくまでも	「積極的事実」はあくまでも
	66	「中沢, 1986:p.20)	(中沢, 1986, p.20)
	66	(Martine, 1970:p.35)	(Martinet, 1970···)
	67	メタリズム	メンタリズム
	67	古典主義整合性	古典主義的整合性
	67	実証主義の問題。そして	実証主義の問題、そして
	68	認 継	認識
	69	乗っ取る	則る
	69注3	「入れ子」型図式の 妥当性について熟考を	「入れ子」型図式の 妥当性については熟考を
	70注11	differ frome	differ from に 熟
	71文献	Barthes, R., …青土社	…みすず書房

		伊藤俊太郎	伊東俊太郎
	7 3	SATO Kunihiro	SATO, Kunihiro
	7 3	bien qu'elle praisse	bien qu'elle paraisse
林 修	83左25 84右42 87左30	そのものに 支配／非支配関係 文節化	そのものに 支配／被支配関係 分節化
岡田 真弦	100,左 8	得んだがために	得んがために
榮谷 温子	110,右 1-5 112,レヅ ム、,1 112,レヅ ム、,2	Arabi prooves	Arabic proofs
村田 真一	115,右 1 115,右 4 116,註 2)	フォンドィージン ヴァーゼムスキー Ф Н Н В И З И Н А	フォンヴィージン ヴァーゼムスキー Ф О Н В И З И Н А

	116, 註 8)	Ц о ш к и н	П у ш к 1
	116, 註 11)	Ф у н — В и з и н	Ф о н — В и з и н
	117, レジ ユメの夕侍 ル	D. I. Fonvizin	D. I. Fonvazine
村上 結花	119 左 16-17	М а r u g y e	М а n u g y e
	120 左 13] М а n u g y e	[М а n u g y e
	〃 28	М а n u g y e VI — 6	М а n u g y e VI — 1 6
	120 右 22	М а h u g y e	М а n u g y e
	121 左 7, 12	М а n u g y e V — 1 8	М а n u g y e VI — 1 8
	〃 34	А t t a t h a n k e i p a 375	А t t a t h a n k e i p a 375
	121 右 31	А t a t h a n h e i p a 391	А t t a t h a n k e i p a 391
	122 左 41	3 9 4 ¹¹⁾	3 9 4] ¹¹⁾
	123 右 7] М а n u g y e	[М а n u g y e

	124, 4) // , 5) // , 8) // 参考 文献	(L i n g y i = 「戸口は出ている こと」 アタタンパ ケ Manugye danmatha.	(L i n g y i = 「戸口に出ている こと」 アタタンケーバ Manugye danmathat.
葉 氷瑩	125, およ び 目次	葉 氷 瑩	葉 氷 瑩

『言語文化研究』第7号 正誤表

頁,段,行	《誤》	《正》			
4右 5	datoc	dato'	108 左 下から1	見を屈め	身を屈め
5右11	と聞こえる、	と聞こえる)、	112 嫌 下から2	Reveries and Sutudies...	Reveries and Studies...
40	hisap]	[hisap]	112 ヴィメ 1	Arabi	Arabic
7右17	/galak/のは、	/galak/は、	2	prooves	proofs
8左10	参照のこと。	参照のこと。]	115 左 1	フォンドイージン	フォンヴィージン
9右1, 4	Dewan Bahasa	Dewan Bahasa	3-4	ヴァーゼムスキー	ヴァーゼムスキー
10 ヴィメ 2	Indonesia	Indonesian	116 註 2)	Финвизина	Фонвизина
3	Eijaan	Ejaan	8)	Цошкин А. С.	Пушкин А. С.
16右18-19	特に、特に個々の...	特に、個々の...	11)	Фун-Визин	Фоун-Визин
鱗嫌 4	...文法II]	...文法II]	117 ヴィメ 題	D. I. Fonvizin	D. I. Fonvizine
21右33	balivianimso「ボリビア方言」	bolivianimso「ボリビア方言」	119 左16-17	Manugpe	Manugye
42 25	[v, z, ʃ]	[v, z, ʒ]	120 左13	[Manugye VI-28]	[Manugye VI-28]
45 24	['star-re]	['sta-re]	28	Manugye VI-6	Manugye VI-16
25	[s-'ta-re]	[s-'ta-re]	右22	Mahugye	Manugye
46 21	in W/m'v	in W/m', v	121 左7,12	Manugye V-18	Manugye VI-18
47 7	tskuau	tsukau	34	Attathahkepia 375	Attathankeipa 375
61左 下から3	yes or on	yes or no	右31	Atathanheipa 391]という。	Attathankeipa 391]という。
62左 下から13	une vasija honda	una vasija honda	122 左 下から3	394 ¹¹⁾	394] ¹¹⁾
12	una vaiija profunda	una vasija profunda	123 右 7-8	[Manugye VI-16]	[Manngye VI-16]
右 下から11	このようなhondo例には	このような例はhondoには	124 注 4)	(L'ingyi=第1夫)	(Lingyi=第1夫)
63左10	両形容詞の	両形容詞の	5) 2	「戸口は出ていること」	「戸口に出ていること」
右 下から1	表意単どうし	表意単どうし	8)	アタタンパ ケ	アタタンケーパ
64右5-6	「積極的事実」あくまでも	「積極的事実」はあくまでも	鱗嫌 4	Manugye danmatha.	Manugye danmathat.
66右20	「中沢, 1986 : p.20)	「中沢, 1986, p.20)	125, 扉目次	葉冰 瑩	葉 冰瑩
35	(Martine,	(Martinet,			
67左12-13	メタリズム	メンタリズム			
下から1	古典主義的整合性	古典主義的整合性			
右 下から12	実証主義の問題。そして、	実証主義の問題、そして、			
68左 下から10	認識	認識			
69左 4	乗っ取る	則る			
注 下から9-8	妥当性について熟考を	妥当性については熟考を			
70注11) 2	deffer frome	differ from			
71 鱗嫌 2	東京. 青土社.	東京. みすず書房.			
下から12	伊藤俊太郎	伊東俊太郎			
73 3	SATO Kunihiko	SATO, Kunihiko			
18	bien qu'elle praisse	bien qu'elle paraisse			
83左25	そのものに	そのものに			
84右42	支配/非支配関係	支配/被支配関係			
87左30	文節化	分節化			
100 右 8	得んだが為めに	得んが為めに			